

## サルガ鼻燈台洞窟遺跡の第1次発掘調査

竹広文明<sup>1)</sup>・会下和宏<sup>2)</sup>・渡辺貞幸<sup>3)</sup>・内田律雄<sup>4)</sup>

### A study on the cave sites at Shimane Peninsula —the first excavation at Sarugahana Tōdai cave site, Mihonoseki town, Yatuka gun, Shimane Prefecture—

Fumiaki Takehiro<sup>1)</sup>, Kazuhiro Ege<sup>2)</sup>, Sadayuki Watanabe<sup>3)</sup>  
and Rituo Uchida<sup>4)</sup>

**Abstract:** There are many caves along Shimane Peninsula coast, and they are considered sea caves. Some of them were used by the ancient people for dwellings or other purposes, and remain as the archaeological sites. These cave sites are located facing the coastal line, so it is considered that the ancient people who would use or used the cave sites were influenced by the sea level changes or other environmental changes. And for these reasons, researches of the cave sites contribute to not only archaeological studies but also palaeo-environmental studies and so on. With these aims, we planned the excavation of the cave sites, and carried out the trial excavation at Sarugahana Tōdai cave site, Mihonoseki town, Yatuka gun, Shimane Prefecture, in 1995.

In 1996, we carried out the first excavation at Sarugahana Tōdai cave site. This cave site is located facing the coastal line between Lake Nakaumi and Sakai Channel. The cave is opened about 4 m above the sea level at present, but the initial bottom of the cave is still unknown, because it is covered with the sediments which have been formed after the emergence of the initial cave. In this 1996s' excavation, we excavated about 10m<sup>2</sup> range of the cave site, and reached about 65cm above the sea level at the deepest excavated point, and we did not reach the initial bottom of the cave yet. As one of the result of this excavation, we could find the surface which is thought to be occupied at a certain time of the Jomon period (possibly the late stage of it), and its level is around 2.4m above the sea level at the south end of the trench. And we think there are more occupied surfaces under this surface. To study further this site and the other cave sites at Shimane Peninsula, we have to carry out more researches.

**Keywords:** cave site, sea cave, Shimane Peninsula, sea level changes, Sarugahana Tōdai cave site.

#### I. はじめに

1) 島根大学汽水域研究センター

Research Center for Coastal Lagoon Environments,  
Shimane University

2) 島根大学埋蔵文化財調査研究センター

Research Center for Archaeological Site, Shimane  
University

3) 島根大学法学部

Faculty of Law and Literature, Shimane University

4) 島根県教育委員会

Board of Education, Shimane prefectural office

島根大学では、昨年度から、島根半島に分布する海食洞窟を利用した遺跡の調査をおこなっており、1995年9月に八束郡美保関町サルガ鼻燈台洞窟の試掘調査をおこない遺跡であることを確認していた(竹広・渡辺・会下・内田, 1996)。著者らは、洞窟遺跡の調査研究が、考古学にとどまらず、古環境の復元など、諸科学にも貢献できるという観点から、島根半島所在の洞窟遺跡の調査研究を計画しており、次の点を目的として研究を推進している。

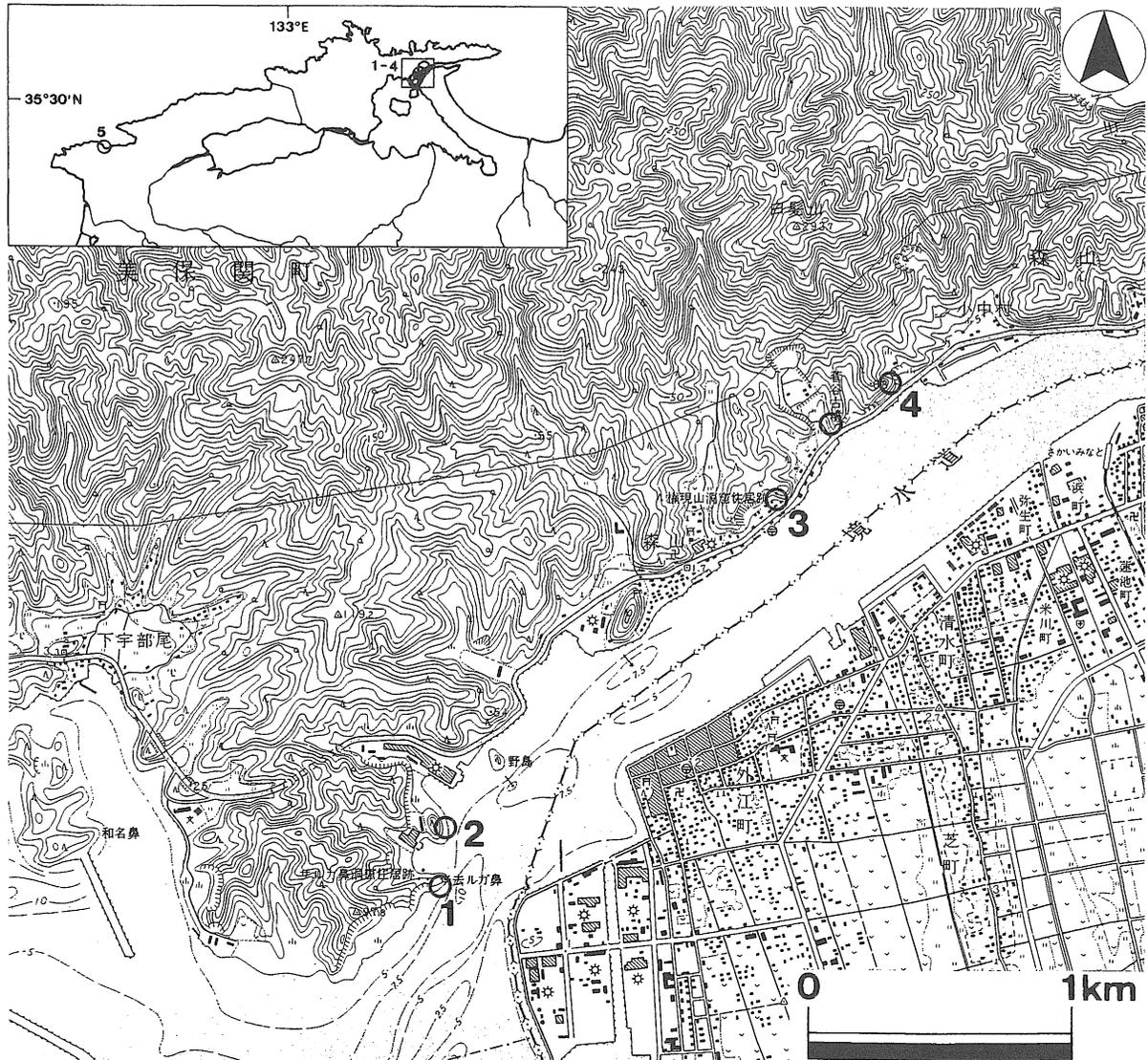


図1. サルガ鼻燈台洞窟遺跡位置図（国土地理院1/25,000地形図「境港」による）。

Fig. 1. Map of Sarugahana Tōdai cave site.

- |                 |          |
|-----------------|----------|
| 1 サルガ鼻燈台洞窟遺跡    | 4 小浜洞窟遺跡 |
| 2 崎ヶ鼻（サルガ鼻）洞窟遺跡 | 5 猪目洞窟遺跡 |
| 3 権現山洞窟遺跡       |          |

1. 洞窟遺跡の考古学的調査により，島根半島における洞窟遺跡利用の歴史的経過を解明する。

2. 洞窟遺跡の背景にある海食洞窟の形成史，さらに洞窟を形成するにいたった海面変動など，自然環境変化についての検討資料を得る。

1996年度は，こうした研究の一環として，美保関町サルガ鼻燈台洞窟遺跡について，第1次の本格的な発掘調査を実施した。

## II. サルガ鼻燈台洞窟遺跡の位置と第1次調査の経過

サルガ鼻燈台洞窟遺跡は，島根県八束郡美保関町森山1073番地に所在する（図1）。遺跡は，中海と境

水道の境の位置にある，島根半島南岸からのびるサルガ鼻と呼ばれる岬の先端付近に立地している。なお，本遺跡の北隣の岬には国史跡崎ヶ鼻（サルガ鼻）洞窟遺跡がある。

遺跡に利用された洞窟は，海岸に面した流紋岩とみられる岩盤に，海による侵食によって形成されたと考えられるが，床面には，洞窟形成後に堆積した土砂，礫が厚く認められる。洞窟は，現状では，海面より約4 m 高い位置に南東方向を向いて開口しており（図版-1），規模は，入り口部で幅3 m，高さ2 m，奥部で幅8 m，高さ2.5 m，奥行きは，直行方向で7 m であるが，洞窟前面の平坦面も含めると10 m となる。なお，洞窟は西に向かってさらに奥へと伸びている。

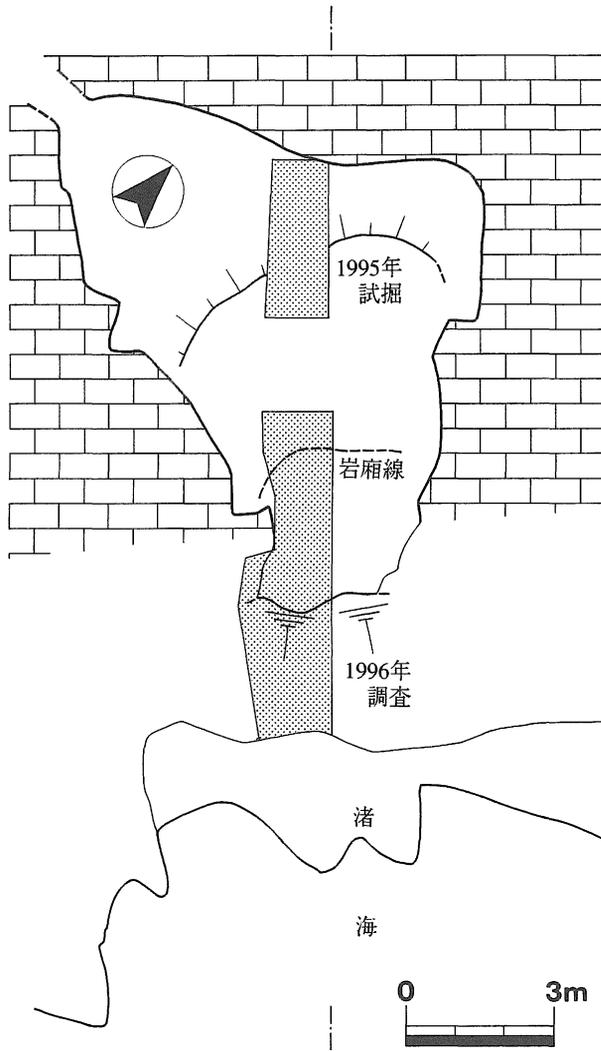


図2. サルガ鼻燈台洞窟遺跡平面図。  
Fig. 2. Plan of Sarugahana Tōdai cave site.  
(網目は調査区)

1995年9月の試掘調査では、洞窟奥部中央に、直行方向に長さ3.3 m、幅約1.5 mの調査区を設け、最深部で地表から約2 mほど発掘し、縄文土器、石器類が出土した。1996年度の調査では、洞窟岩廂線付近および洞窟前面のテラスに、長さ約6.5 m、幅1.5 mもしくは2 mの調査区を設定した(図2, 図版-2,3)。なお、この調査区は、試掘調査の調査区の延長線上になるように設定し、洞窟長軸方向の堆積状況を観察することにした。そして調査区を深さ1~1.5 m前後発掘し、表土から中世の土師質土器、その下層から縄文土器コンテナ1箱分、石器類、炭化物類コンテナ1箱分の資料を得た。

調査期間、体制は次の通りである。

《調査期間》

1996年7月25, 26日, 29日~8月11日

《調査体制》

〈調査主体〉

島根大学汽水域研究センター長 徳岡隆夫

〈調査担当者〉

島根大学汽水域研究センター助手 竹広文明

〈調査委員〉

島根大学法文学部教授 渡辺貞幸

島根大学法文学部教授 田中義昭

島根大学埋蔵文化財調査研究センター助手  
会下和宏

〈調査員〉

神柱靖彦, 石田陽子, 楨原桃代, 渡辺桂子, 岩田亜希子, 竹内 希, 藤原光代, 宮崎克美, 山内英樹, 浅井宏是, 五十嵐真人, 住友孝嘉, 伊藤国義, 今岡利江, 下田幹子, 広瀬雄介, 室田貴彦, 橋本雄司, 久保奈都美(島根大学生), 高橋保夫, 永田公夫(森山郷土を考える会), 牟礼時晴

### Ⅲ. 1996年度調査の結果

#### 1. 遺跡の層序と遺物の出土状況

1996年度の調査区は、現状で洞窟床面となっている海面から約4 mの高さに広がる平坦面、および海面へと下る斜面部におよんでいる。発掘は、地表から1~1.5 m前後の深さまでおこない、平坦面部では、海面から約3 mの高さまで発掘がおよんだことになり、洞窟前面の斜面部では、最深部で海面から約1.5 mの高さまで発掘がおよんだことになる。なお、調査区南端部の一部では、小範囲で試験的に海面から約65 cmの高さまで発掘をおこなっている。また、1995年度および本年度におこなった測量調査時の床面の観察所見や洞窟入り口部の状況からみると、規模は確かでないものの、洞窟入り口付近を中心に多少の土取りがおこなわれているようであり、もともとは洞窟入り口は現在よりいまま少し高さも低く狭かったようである。

#### a. 遺跡の層序(図3)

現地表からの堆積層の状況は、平坦部では、第2層以下は、奥部に向かって下るように堆積している。第2層は、今回の調査区では、奥側のみに認められたが、前述した土取りを受けていると考えられることからすれば、もう少し洞窟の前面へも広がっていた可能性がある。そして、表土は、これらの堆積層を覆ってほぼ水平に堆積しており、洞窟がほぼ現在の状態になってから、形成されたものとみられる。洞窟前面の斜面部では、35~60度の傾斜で下降する地表面にそって表土層が形成されており、洞窟前面の堆積層を切るように堆積している。おそらくもともとは、洞窟前面にももう少し広く堆積層が形成されていたのが、風雨による削平を受け、植物の

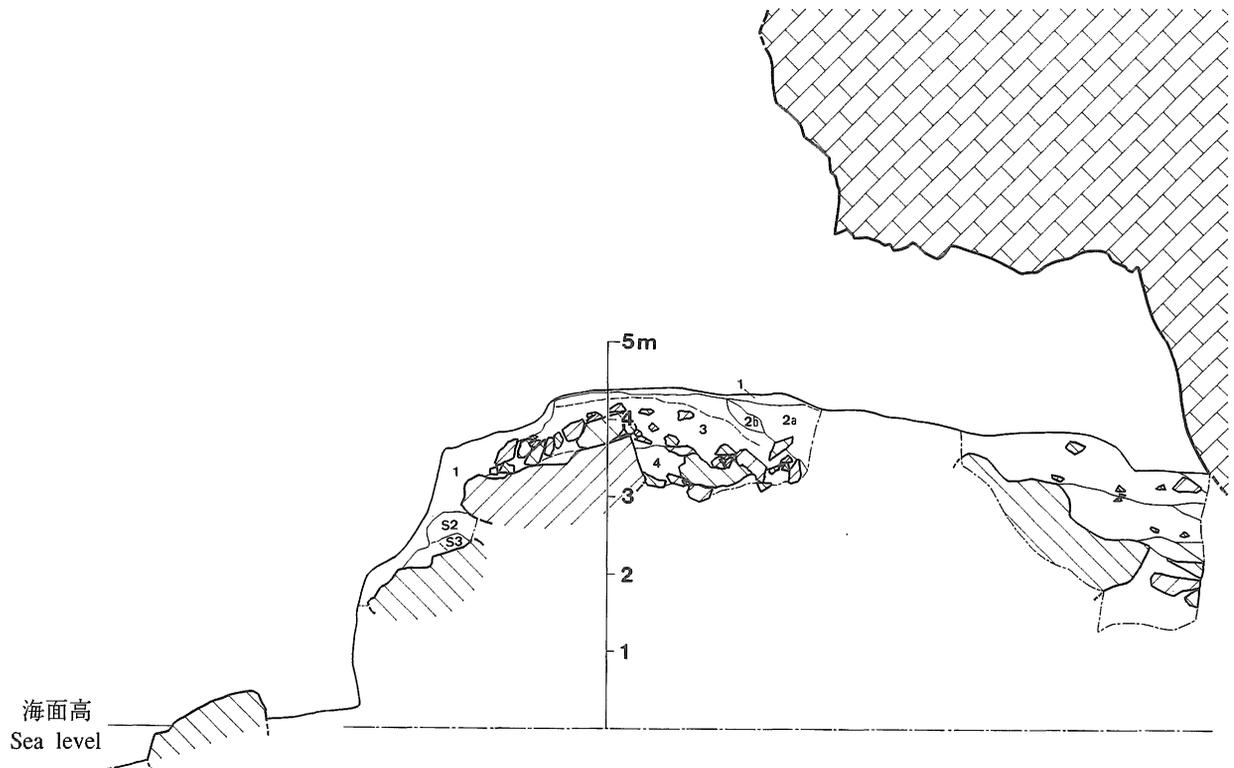


図3. サルガ鼻燈台洞窟遺跡断面図.

Fig. 3. Cross section and stratigraphical profile of Sarugahana Tōdai cave site.

(断面を作製した位置は図2に示す)

- | 平坦面部                                | 南端部                          |
|-------------------------------------|------------------------------|
| 1 灰褐色, 黒褐色土層 (表土. 砂礫層および有機質粘土層から成る) | 1 淡褐色有機質土層 (表土)              |
| 2a 明黄褐色砂礫土層                         | S2 淡褐色砂礫土層 (東壁では粘土分多くしまっている) |
| 2b 淡黄褐色砂礫土層                         | S3 灰褐色粘質土層 (木炭片, 焼土粒多く含む)    |
| 3 淡褐色砂礫土層 (上部は粘土分が多くしまっている)         |                              |
| 4 淡茶褐色砂礫土層                          |                              |

作用などにより表土層が形成されたのであろう。また、各層は、岩廂線付近を頂部として堆積しているようである。

各層の状況は、平坦面部では、表土をふくめ4層に分けられる。第1層は、現状の表土層であり、灰褐色もしくは黒褐色を呈しており、砂礫を主体とした部分と有機質粘土を主体とした部分が認められる。第2層は、a, bに細分され、第2a層は、調査区奥部に厚さ80 cm ばかり認められ、明黄褐色砂礫土層であり、第2b層は、約20 cm の厚さでレンズ状に認められる、淡黄褐色砂礫土層である。第3層は、厚さ80 cm 前後の淡褐色砂礫土層であり、下半部は礫の割合が高い。第3層は、洞窟前面に近づくと、直接表土層に覆われ、斜面部では、削平されたような状態で、層が途切れている。第4層は、厚さ50 cm までを調査したが、淡茶褐色砂礫土層で湿り気があり、この層がさらに下位に続くようである。また、第4層は、洞窟前面に向けては、岩廂線から1.5~4 m 前方に横たわる長さ2.5 m にもおよぶ崩落礫で

さえぎられ、洞窟前面の堆積層との関係がつかみにくくなっている。洞窟前面の斜面部 (図版-4) では、表土も含め5層が認められるが、前述した崩落礫のため平坦面部の堆積層との関係がはっきりしていないため、便宜的に、表土より下層については、南端部第2~第5層とする。なお、南端部では、この崩落礫のため発掘がおこなえず、この部分が壁となっているが、これを南端部北壁とする。南端部第2層は、淡褐色土層であるが、南端部北壁では砂礫土層であるが、調査区東壁では礫を含む割合が低くなっている。巨大な落盤が堆積層に影響を与えている可能性も考えているが、両壁での様相の差が、層の差として捉えられるまでにはいたっていない。南端部第3層は、厚さ20~30 cm でレンズ状に認められる灰褐色粘質土層であり、木炭片、焼土粒を多く含んでおり、また、本層の上面は、よくしまっており、上層の南端部第2層とはきれいに肌分かれしており、一時期の生活面であると考えられる。南端部第4層は、厚さ30 cm 前後の灰褐色砂礫土層であり、

同第5層は、礫を多く含む橙褐色粘質土層である。なお、東壁で海面から2 m 前後の高さにある崩落礫のためか、第4、5層は東壁では明確におさえられていない。また、この礫のため、南端部第5層の下部まで調査できたのは、50 cm 四方の小範囲である。このように、崩落礫などのため、調査区全体にわたる層位的な検討が難しい状況となっている。南端部第2層は、位置的には、平坦面部の第3層もしくは第4層に対応してくるともみられるが、こうした層序関係を明確にしていくことが、今後の課題となる。

#### b. 遺物の出土状況

1996年度の調査では、縄文時代遺物がおもに出土しているが、出土の状況は、より下層まで調査がおよんだとみられる南端部からの出土量が多い。南端部では、部分的な試掘部分もふくめると海面から+65 cm の高さまで発掘しているが、一時期の生活面と考えられる南端部第3層上面付近から縄文土器、石器類、木炭粒が出土しはじめ、レベルとしては、海水面より+2.47 m~+1.47 m にわたり遺物が出土した。また、その出土の状況は、南端部第3層上面レベルである+2.4 m 前後、そしてその下位の+1.6 m 前後の2箇所遺物が集中して認められたが、調査の面積が狭いため、これを傾向として捉え、この範囲に2時期にわたる遺物出土層があるとみるのは、まだ検討を要する。なお、遺物の内容からは、これを判断するだけの資料を得るまでにはいたっていない。また、今回の調査区南端部近くの斜面部にできた崖面に、プライマリーとみられる堆積層が露出しており、一部壁面の清掃調査をおこなったが、海面から+20~+30 cm の高さから土器片が堆積層に挟まれているのが認められ、前述した遺物包含層の下位にさらに遺物包含層のある可能性が高いことが分かった。洞窟平坦面部の調査区では、遺物の出土量は少ないが、第3層より縄文土器および石器類が少量出土しており、この周囲からは、木炭粒が多く出土している。ただし、堆積層の状況からは、生活面と考えられるような層は認められず、その産状については明確にするまでにはいたらなかった。なお、平坦

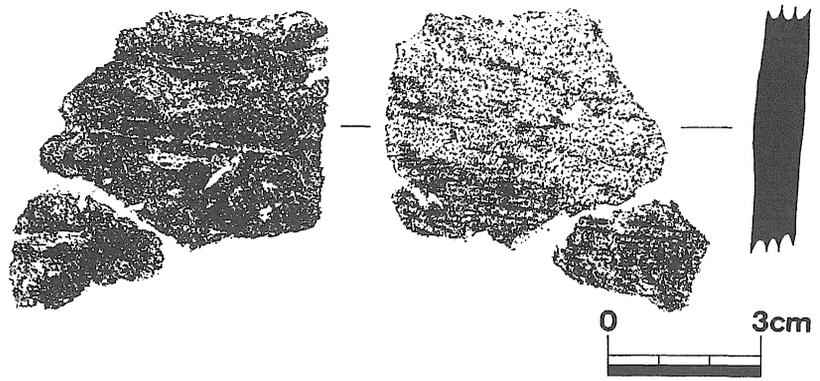


図4. サルガ鼻燈台洞窟遺跡出土土器。

Fig. 4. Potsherd excavated at Sarugahana Tōdai cave site.

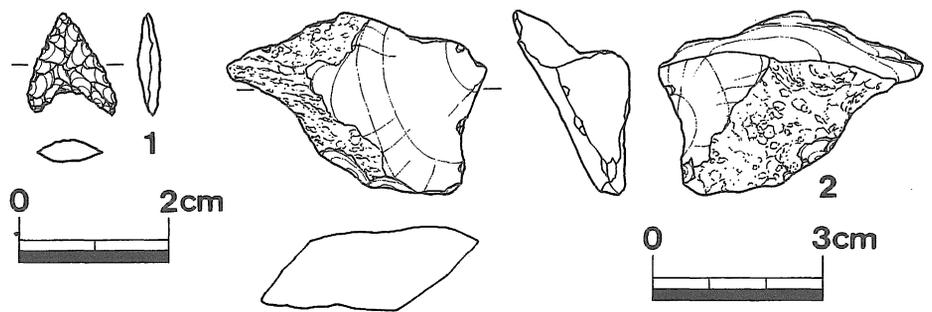


図5. サルガ鼻燈台洞窟遺跡出土、採集石器。

Fig. 5. Stone tools excavated, or collected at Sarugahana Tōdai cave site.

面部および斜面部の表土層からは、同一個体とみられる土師質土器片が出土している。

## 2. 出土遺物

出土遺物および表面採集遺物には、縄文土器、石器類、土師質土器、木炭類などがある。

### a. 縄文土器 (図4, 図版-5)

平坦面部調査区第3層から出土した土器は、いずれも細片の無文土器であり、その特徴は十分に分からないが、地文が縄文の土器も出土している。

南端部調査区第3層以下の包含層から出土した土器は、いずれも無文土器であるが、地文が縄文の土器も認められる。図4の土器は、表面は削りで成形された後、なでにより平滑に仕上げられており、裏面は条痕調整であり、厚さ8~9 mm 前後である。これらは、ともに後期ころの土器であろうか。また、位置的にはこれらの下位にあたとみられる南端調査区わきの壁面採集の土器 (図版-5下段中央) は、無文部の破片であるが、厚さ5~6 mm 前後の薄手の土器である。

### b. 石器類 (図5, 図版-6)

平坦面部調査区第3層出土の石器には、サヌカイト剥片、黒曜石破片がある。

南端部調査区包含層出土の石器には、黒曜石製石

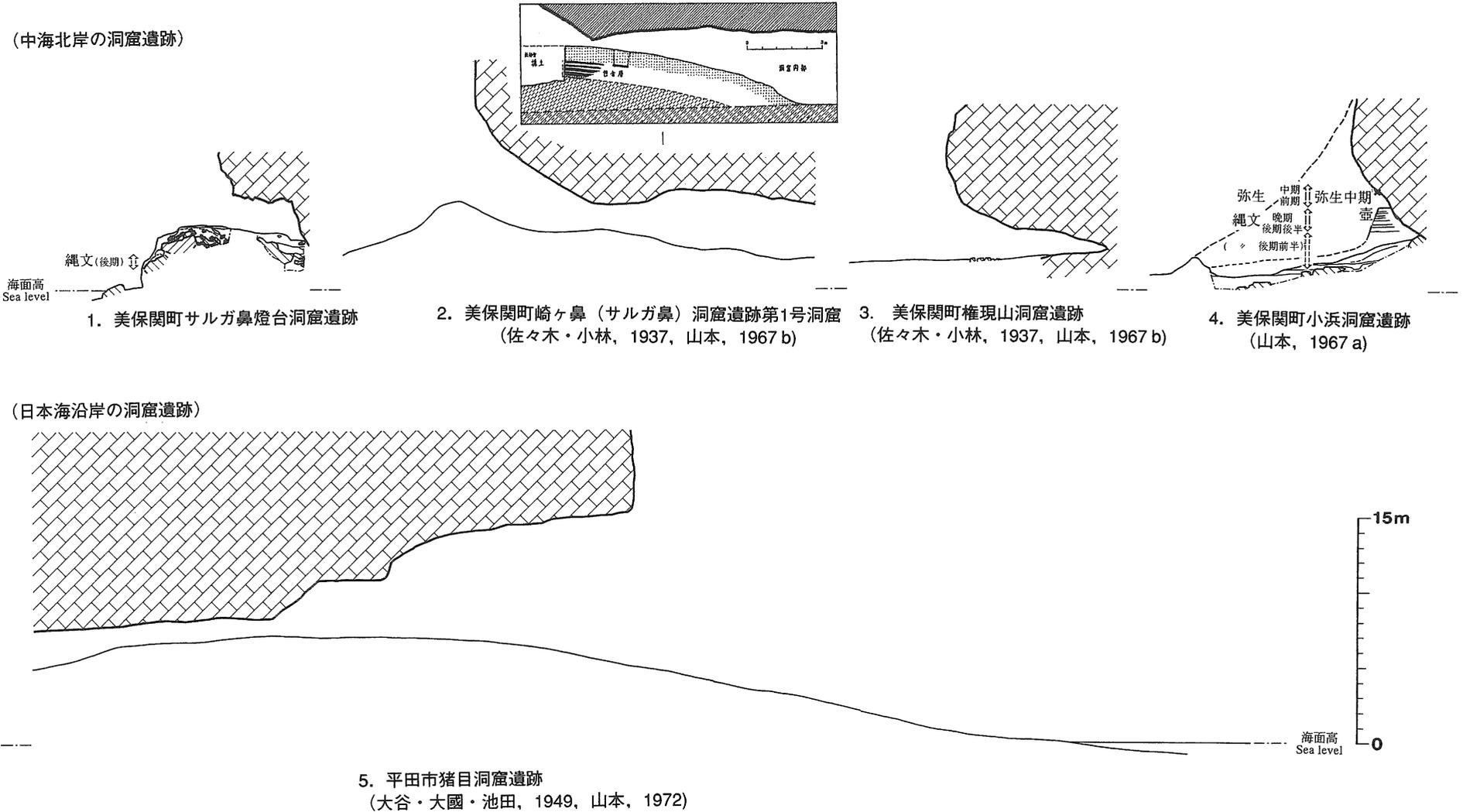


図6. 島根半島洞窟遺跡の立地.

Fig. 6. Cross sections of the cave sites at Shimane Peninsula.

((上記文献をもとに一部加筆して作製. 各遺跡ともに海面高を基準に測量されているが, 将来的には標高を求める必要がある.))

鏃、同剥片、同碎片、サヌカイト剥片、安山岩剥片、玉髓剥片などがある。図5-1の黒曜石製石鏃は、長さ1.38 cm、幅1.2 cm、厚さ3 mmであり、両面の全面にわたり加工がほどこされている。

なお、遺跡前面の渚部で、サヌカイト製楔形石器、安山岩製石核片（図5-2）、敲石を採集している。安山岩製石核片は、残存部で、長さ4.65 cm、幅3.25 cm、厚さ1.5 cmであり、素材の比較的鋭利な縁辺で、両面から剥片を剥離している。

#### c. 土師質土器（図版-5）

図版-5下段右端は、表土から出土した土師質土器皿であり、底部には糸切り痕が認められる。

### IV. 調査の成果と今後の課題

#### 1. 1996年度までのサルガ鼻燈台洞窟遺跡調査の成果と今後の課題

サルガ鼻燈台洞窟遺跡は、1995年度の調査により、少なくとも縄文時代に利用された遺跡であることが明らかとなっていた。1996年度の調査では、南端部第3層において、木炭片、焼土粒を多く含み、その上面はよくしまり、一時期の生活面と考えられる面をおさえることができた。出土した土器からみると、その時期は縄文時代後期ころとみられ、その細かな時期が今後の課題とはなるが、この時期に、現在の海面から南端部分で+2.4 m 前後のところまで堆積が進行した段階で、ある程度安定した状態で、縄文人により利用されたようである。また、この他の部分でも、遺物の出土があったが、その周囲で生活面と認められるような層は確認しておらず、今後その産状を明確にしていくことや、遺構面をおさえていく必要がある。また、洞窟斜面にできた崖面からは、海面から+20~+30 cm の高さから土器が出土するのが明らかとなり、洞窟利用開始期の問題にも係わる手掛かりが得られており、その時期や産状も明確におさえていきたい。今回の調査では、発掘到達最深部は、南端部の先行トレンチであり、海面から+65 cm にまで達しているが、まだ洞窟の底面には到達していない。洞窟前面の崖面の状況からみると、さらにまだ掘り下げが必要なようである。また、昨年度および今回の発掘からすると、現在の洞窟の床面となっている堆積層中には、何層かにわたり大型の落盤石が含まれており、洞窟形成後においても、洞窟の外観は変貌しながら、現在の姿にいたっていることがあらためて確かめられた。本洞窟では、洞窟内の堆積物が侵食をあまり受けていないようで、洞窟形成後の堆積物が保存されているため、形成後の洞窟の変遷についての情報も得られた

が、こうした視点は洞窟の形成史を考える上でも重要であろう。

#### 2. サルガ鼻燈台洞窟遺跡の調査と島根半島洞窟遺跡の研究

島根半島洞窟遺跡研究の展望については、竹広・渡辺・会下・内田(1996)文献でふれており、島根半島洞窟遺跡について、1. 立地、2. 利用時期、3. 利用の開始期などの問題に関しての現在の研究の課題を示していた。1996年度のサルガ鼻燈台洞窟遺跡の調査では、いくつかの成果は挙げられたが、まだ今後の調査により検証していかなければならない課題も多く、前回提示した問題を掘り下げるにはなお調査の進展が必要である。今回の調査では、「2. 利用時期」についての手掛かりとともに、さらに、海面上わずかの高さから遺物が出土するのが認められ、「3. 利用開始期」の問題についての研究を進展させる手掛かりも得られている。今後、サルガ鼻燈台洞窟遺跡をはじめ、複数の洞窟遺跡で、生活面あるいは遺構面を明確におさえていくなどの調査を通し、冒頭で提示した研究目標である、洞窟遺跡利用の歴史やその背景にある自然環境変化の解明を目指していきたい。

#### おわりに

第1次調査および本稿を作成するにあたっては、多くの方々にお世話になりました。お名前を記し、お礼申しあげます。なお、本文は、竹広が原案を制作し、これを執筆者全員で協議して完成させたものである。

山本 清、佐々木 謙、田中義昭、高安克己、林 正久、麻生 優、岡本東三、作野廣秋、錦織慶樹、津森茂道、河野 正、永田和久、美保関町教育委員会、森山共栄会、森山地区学習等供用会館

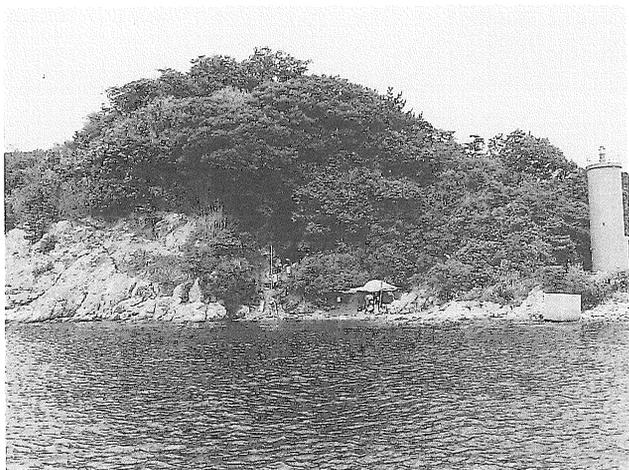
本調査は、文部省科学研究費補助金基盤研究(A)『山陰汽水域の自然史と文化史』（研究代表者：徳岡隆夫）の一部を使用して実施した。

#### 引用・参考文献

文化庁文化財保護部(1978)史跡・名勝・天然記念物および埋蔵文化財包蔵地所在地地図 全国遺跡地図 島根県。文化庁文化財保護部、東京、60 p.  
文化財保護委員会(1967)全国遺跡地図（島根県）史跡・名勝・天然記念物および埋蔵文化財包蔵地所在地地図。文化財保護委員会、東京。

- 鹿野和彦・山内靖喜・高安克己ほか(1994)松江地域の地質・地域地質研究報告 5万分の1地質図幅岡山(12)第17号. 通商産業省工業技術院地質調査所, つくば, 126 p.
- 前島己基(1978)縄文式土器の変遷 前期の土器. さんいん古代史の周辺〈上〉 ふるさと文庫1. 山本 清監修 pp.9-13. 山陰中央新報社, 松江.
- 松本岩雄(1986 a)原始・古代の美保関. 美保関町誌上巻. 美保関町誌編さん委員会編 pp.113-194. 美保関町, 美保関.
- 松本岩雄(1986 b)美保関町の考古資料. 美保関町誌下巻. 美保関町誌編さん委員会編 pp.351-578. 美保関町, 美保関.
- 直良信夫(1937)崎ヶ鼻第1号洞窟及び権現山洞窟の自然遺物. 考古学, 8-10: 476-479.
- 直良信夫・吉田格(1939)出雲国森山村崎ヶ鼻第1号洞窟出土遺物. 考古学雑誌, 29-8: 41-45.
- 日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会編(1967)日本の洞穴遺跡. 平凡社, 東京, 499 p.
- 岡 芳雄(1948)崎ヶ鼻洞窟遺跡. 島根考古学, 2: 4-6.
- 大村俊夫(1953)崎ヶ鼻調査のメモ. 伯耆文化, 28: 9-11 (伯耆文化研究会編(1988)伯耆文化, 第2, pp.267-269. 国書刊行会, 東京. 所収).
- 大谷従二・大國一雄・池田次郎(1949)出雲国猪目洞穴遺跡概報. 人類学雑誌, 61-1: 1-6.
- 佐々木謙(1954 a)出雲・崎ヶ鼻洞窟遺跡. 佐々木古代文化研究室月報 ひすい, 7: 1-3 (佐々木古代文化研究室(1965)ひすい 佐々木古代文化研究室月報集(1-100号). 稲葉書房, 米子. 所収).
- 佐々木謙(1954 b)中海沿岸縄文式文化-1-. 佐々木古代文化研究室月報 ひすい, 8: 1-4 (佐々木古代文化研究室(1965)ひすい 佐々木古代文化研究室月報集(1-100号). 稲葉書房, 米子. 所収).
- 佐々木謙(1955)中海沿岸縄文式文化-2-. 佐々木古代文化研究室月報 ひすい, 9: 1-2 (佐々木古代文化研究室(1965)ひすい 佐々木古代文化研究室月報集(1-100号). 稲葉書房, 米子. 所収).
- 佐々木謙(1978 a)洞窟のすまい. さんいん古代史の周辺〈上〉 ふるさと文庫1. 山本 清監修 pp.32-36. 山陰中央新報社, 松江.
- 佐々木謙(1978 b)岩陰の生活. さんいん古代史の周辺〈上〉 ふるさと文庫1. 山本 清監修 pp.36-39. 山陰中央新報社, 松江.
- 佐々木謙(1978 c)海底の遺跡. さんいん古代史の周辺〈上〉 ふるさと文庫1. 山本 清監修 pp.39-43. 山陰中央新報社, 松江.
- 佐々木謙(1978 d)狩りと漁と. さんいん古代史の周辺〈上〉 ふるさと文庫1. 山本 清監修 pp.76-78. 山陰中央新報社, 松江.
- 佐々木 謙・浜田正春(1986)考古. 境港市史上巻. pp.239-315. 境港市, 境港.
- 佐々木謙・小林行雄(1937)出雲国森山村崎ヶ鼻洞窟及び権現山洞窟遺跡—中海沿岸縄文式文化の研究1—. 考古学, 8-10: 458-475.
- 宍道正年(1974)島根県の縄文式土器集成 I. 報光社, 平田, 141 p.
- 宍道正年(1985)島根県 中海沿岸の遺跡群《漁撈にささえられた縄文遺跡群》. 探訪縄文の遺跡・西日本編 有斐閣選書 R. 潮見 浩編 pp.197-207. 有斐閣, 東京.
- 竹広文明(1995)中海・宍道湖周辺地域における生業関連資料集成. LAGUNA (汽水域研究), 2: 57-70.
- 竹広文明・渡辺貞幸・会下和宏・内田律雄(1996)島根半島洞窟遺跡の研究—島根県八束郡美保関町サルガ鼻燈台洞窟遺跡の試掘調査—. LAGUNA (汽水域研究), 3: 117-126.
- 豊島吉則(1967)山陰海岸における海蝕地形に関する研究. 鳥取大学教育学部研究報告 自然科学, 18-1, 2: 64-98.
- 豊島吉則(1978)山陰海岸における完新世海面変化, 地理学評論, 51-2: 147-157.
- 豊島吉則先生退官記念事業会編(1995)さんいんの自然環境と産業風土. 富士書店, 鳥取, 275 p.
- 内田律雄(1976)サルガ鼻第三号洞穴内採集の土器. 八雲立つ風土記の丘, 19: 8-9.
- 八幡一郎(1967)古代人の洞穴利用に関する研究. 日本の洞穴遺跡. 日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会編 pp.357-373. 平凡社, 東京.
- 山本 清(1961)西山陰の縄文式文化—土器を中心として—. 山陰文化研究所紀要, 1: 1-39.
- 山本 清(1967 a)山陰地方の洞穴遺跡. 日本の洞穴遺跡. 日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会編 pp.210-218. 平凡社, 東京.
- 山本 清(1967 b)美保関町サルガ鼻・権現山洞窟住居跡について. 島根県文化財調査報告書第3集. pp.69-82. 島根県教育委員会, 松江.
- 山本 清(1972)猪目洞窟遺物包含層について. 島根県文化財調査報告書第8集. 石塚尊俊編 pp.59-86. 島根県教育委員会, 松江.
- 山本 清(1995)古代出雲の考古学—遺跡と歩んだ70年—. ハーベスト出版, 松江, 353 p.
- 山内清男(1967)洞穴遺跡の年代. 日本の洞穴遺跡. 日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会編 pp.374-381. 平凡社, 東京.

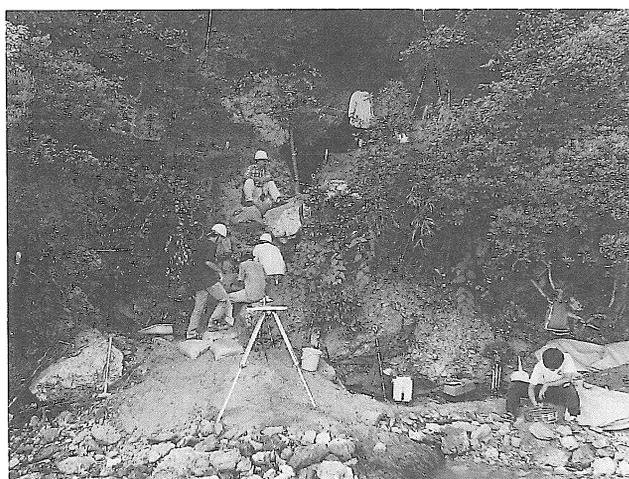
図版  
Plate



1 サルガ鼻燈台洞窟遺跡全景。  
View of Sarugahana Tōdai cave site.



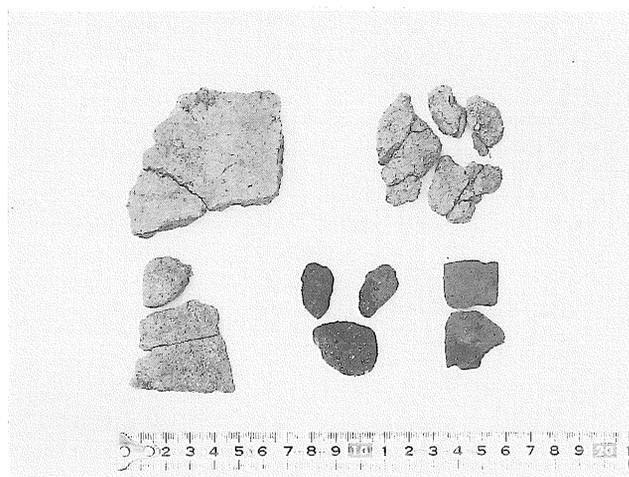
2 洞窟内部調査風景。  
Excavation at the trench in the cave.



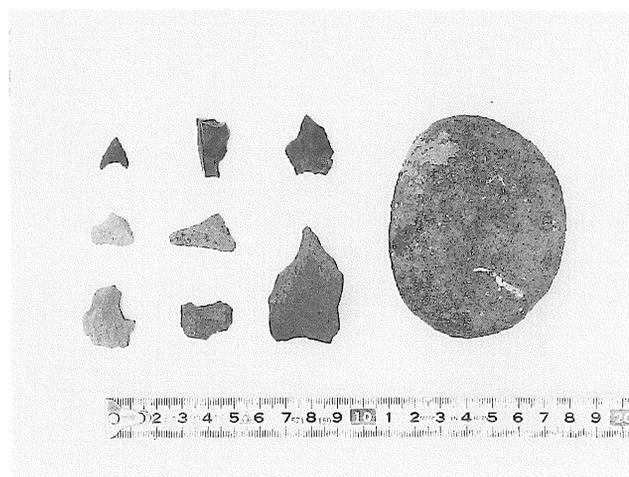
3 洞窟前面調査風景。  
Excavation at the trench in front of the cave.



4 洞窟前面調査区全景。  
View of the trench in front of the cave.



5 出土土器。  
Potsherd excavated at the cave site.



6 出土、採集石器。  
Stone tools, core and flakes excavated, or collected at the site.